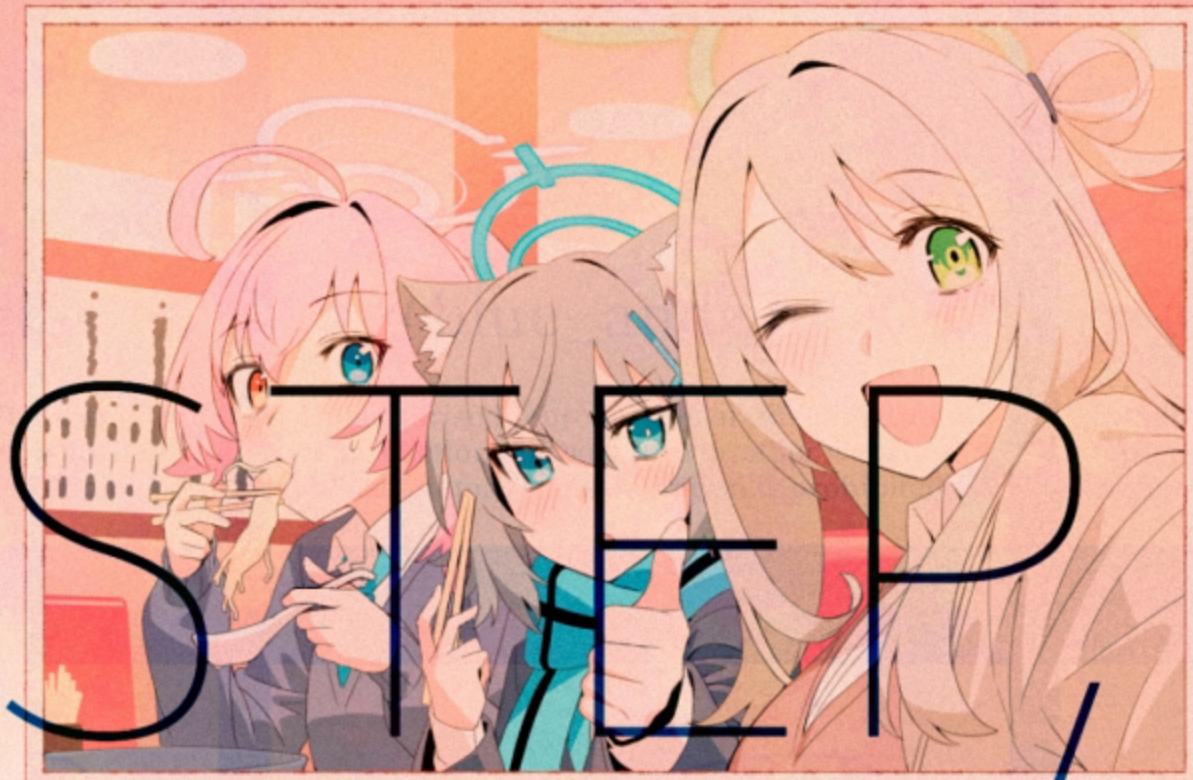




HALF STEP, PEACE SIGN.



written
アフリカの星逆

illustration
blew



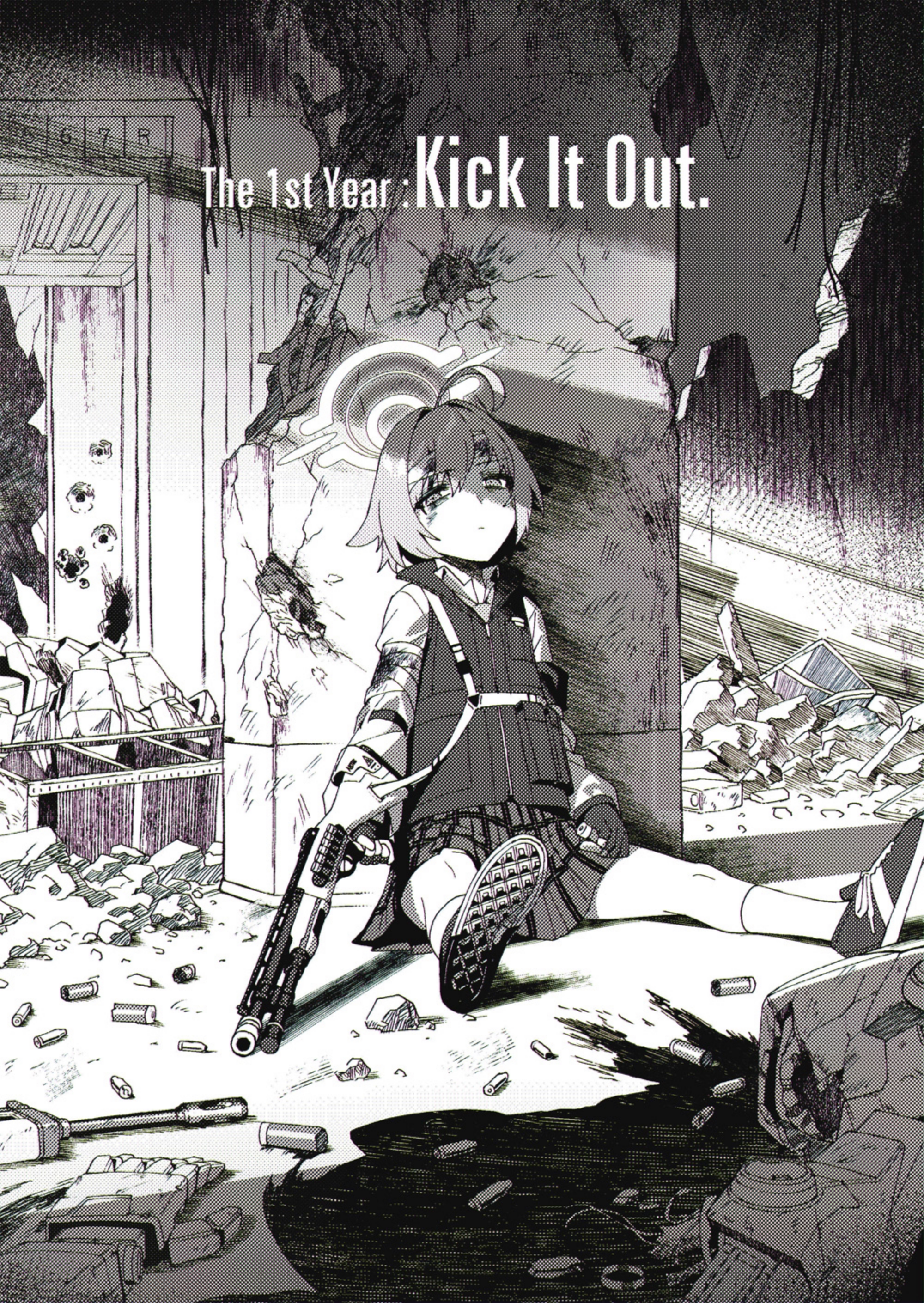




卒業おめでとう!



The 1st Year: Kick It Out.





冷えた砂漠の風が、首元を通り過ぎる。終電をとつくに無くした駅のホームは、時折明滅する自販機の明かり以外に光源はなく、自分の足音以外は何も聞こえない。

かつては盛行を誇ったアビドスの鉄道も、今となつては砂に埋もれないよう日に数本の運行を保つのがせいぜいだ。

土着企業ネフティスグループがこの地に残した、いくつかの遺産。このホームから見える駅併設の商業ビルも、その一つと言つていいだろう。

アビドス中央駅のホームから、改札口に降りる階段。その囲いに身をひそめ、擬装用のポンチヨの下から双眼鏡でビルのガラス張りを覗く。その際、ヘイローが暗闇に浮かばないよう、頭を下げてままにするのを忘れない。

「……あいつら、やっぱり」

数十メートル先に見えるフロアには、オートマタたちが何やら重そうな物資を運び込んでいるさまが見えた。

確かにこのビルの大半は空きテナントではあるが、それにしただって新店舗の開店準備というわけではないだろう。奴らが抱えている箱に入っているのは、ほとんどが弾薬や爆薬、銃火器の類。それも、キヴォトスでの販売が許可されているグレードのものではない。単純所持でもヴァル

キューレ警察学校が摘発に動くレベルの違法物ばかりだ。

そして、オートマタたちの胸に刻印されているロゴには、うんざりするほど見覚えがある。カイザーグループ——ネフティス撤退後、この自治区で幅を利かせているコングロマリット。その企業体質は徹底した拝金主義であり、アビドス高等学校が抱える借金の大部分を握る高利の債権者でもあった。

（だからって、こんなの見過ごすわけにいかない）

元々、この駅の周辺はアビドス高等学校の直轄だ。値段が付く物はボールペンから土地の権利まで手放してきた前生徒会ではあるが、外部との数少ない門戸である鉄道だけは、現生徒会長の意向もあって頑なに守ってきた。

事実、ここを失えば、アビドスに暮らす市民の生活はもとより、他学区からの来訪者が制限されてしまい経済活動にも深刻な影響が出る。文字通りの生命線だ。

カイザーグループはそこに目を付けたのだろう。物資を運び込み、拠点を築く。沿線の施設を実効支配してしまえばしめたもの。武力と物量を盾にこちらを交渉という名の脅迫で締め上げ、鉄道の利権と物資の運搬ルートを確保するのが目的といったところか。前哨基地の設営も、後付けの契約で「駅ビルのテナントを借り上げて倉庫にしているだけ。それに対して勝手に脅迫の意図を感じているのは、アビドス側の問題」などとしらを切るに決まっている。

「銃、よし。弾、よし。装備……よし」

身に着けた装具の最終確認を済ませる。実効支配に対抗するには、実力行使しかない。幸い、

不穏な動きをたまたま目撃した住民からの情報提供が早かったおかげで、敵拠点の構築はまだ進んでいないようだ。今なら自分一人で制圧できる範疇にある。

「守るならまだしも、攻め込むなら先輩はあんまりあてにならないし」

ひとり呟き、靴紐を結び直す。羽織っていたポンチョを脱ぎ捨てると、夜風に揺れるのは桃色の短髪。スリングに吊ったセミオートショットガンのグリップを握ったアビドス高等学校一年生にして生徒会副会長——小鳥遊ホシノは、鋭い眼光でまっすぐに標的を睨み、ホームから線路に向かつて一気に駆け出した。

当該エリアの間取りは事前に頭に叩き込んだ。索敵で把握した敵の装備、規模、練度は想定の範囲内。単騎での掌握は十二分に可能。

ホームゲートを飛び越え、バラストの石を踏み、レールを蹴り、体を前へ。眼前に迫る広告看板めがけて跳躍、飛び乗ったホシノは、その縁が軋むほどの踏み切りで飛び出すと同時に、ショットガンのストックを肩に押し当てた。

夜風にあおられ、スカートがはためく。放物線の点を過ぎ、浮遊感が落下感に変わる中で照準の先にあるのは、ビルの大きな窓ガラス。その向こうにいたPMCがこちらに気づいた様子だが……もう遅い。

腹に響く二度の銃声。重い反動が続けて骨格を殴りつけ、炸裂する銃火が視界に広がる。夜風に広がる硝煙のにおいを置き去りに、ホシノが突き出した靴裏はひびの入ったガラスを蹴り破り、その向こうにいた兵士の顔面を捉えて吹き飛ばした。

The 2nd Year: 初花凜々



砂漠に囲まれた学校を五周。そのノルマを精神力だけで終えた頃には、アビドスの空は夕日を見送って藍色に沈みかけていた。

「うへー、お疲れお疲れ。ストレッチは欠かさずやりなね。それと、一気に水飲んだら気持ち悪くなるから、少しずつにしときなさい」

校門に崩れ落ちるようにして転がる二人を尻目に、ホシノは汗ばんだ額をタオルで拭いながら声を掛ける。対して、シロコとノノミは荒く掠れた呼吸を繰り返す以外に何もできない。もう、どんなに絞り出そうにも体力など残っていなかった。

「えーっと……大丈夫？」

「ほしの、せんぱい、には……」

「ん……そう、みえる……？」

「まあ、こういうのは継続と慣れだよ」

そう言って、どこから取り出したのかスポーツドリンクのペットボトルを二本、ノノミ達の隣に置く。どうやら、先行している間に自販機で買っていたらしい。

「でも、そうだねえ。走ってる二人を見て気付いたところで言えば、シロコちゃんはずっと短距離のフォームだったのが気になったかな。走り始めはノノミちゃんより体力が残ってたのに、今じゃ同じくらいへばってるのはそれが原因。ペースを一定に保って、消耗を抑える体の使い方を覚えるべきだね」

「ん……」

「それからノノミちゃん。君の場合は筋力がないのもそうだけど、銃の持ち方を変えたほうがいい。ミニガンなんて重くて大きいものを、腕の力だけで振り回そうとするからしんどいんだよ。こういうのは、体幹から足腰まで使って重さを分散させるの。ほらやってごらん」

「すいません……今はちょっと……無理です……」

「うへ、じゃあ明日走る時にでも試してみてよ。たぶん今日より少しは楽になるからさ」

「あし、た……？」

響く呻き声の二重奏。

これを？ 明日も？

「そりゃそうだよ。言ったでしょ、こういうのは継続と慣れだって。逆に言えば、サボればそのぶん土台がガタガタになっていくんだよ。学校五周は基本メニュー。その他に筋トレやら訓練やら組み込んでいくから、そのつもりで」

気が滅入ることを言われた気がするが、頭が理解を拒みそうになる。しかし、それでも投げ出すわけにはいかない。

入学式までに、自分達はホシノの特訓を乗り越えて力を証明しなければならないのだ。

「今日はもう夜になっちゃったし、ここで解散かな。晩ご飯に鶏ささみ買っておいたから、それ食べて早めに寝なさいね。じゃ、また明日」

踵を返し、ホシノは淡泊な挨拶を残してスタスタと歩き去っていく。荷物を取って家に帰るのだろうか。その姿には疲労の色など微塵も覗えない。

「ノノミ、立てる？」

「はい……なんとか……」

対して、ボロボロの二人は地面に手を付きながら、やっとの思いで身を起こすと、ペットボトルを揃って開封した。

砂でジャリジャリとした口の中に、甘い味が吸い込まれていく。

喉の渇きも、度を超すと感じなくなるんですね。ノノミにそんなことを考える余裕が出てきたのは、たっぷり十数分は休憩を挟んでからだだった。

「今日はもう、お風呂に入って寝たいです……」

「ん、ストレッチしろってホシノ言ってた。あと、とりささみ」

「正直、あんまり元気も食欲ありませんけど……そうですね、言われたことはやらないと」
ふらつきながらも筋を伸ばし、校内のシャワールームに倒れ込む。

だが、体を洗おうにも腕に力が入らない。結局、ノノミとシロコは交互にお互いの体を流すようにして入浴を終え、乳酸で全身が震える中で味のしないサラダチキンを囓るはめになった。

「それじゃ、電気消しますね。シロコちゃ——」

「くかー……」

「……ふふっ、おやすみなさい」

アビドス高校から、灯が消える。

残り十三日。こうして、入学を賭けた勝負の初日は幕を下ろした。

The 3rd Year : **BE FREE.**



「先生は気にしなくていいって、何度も言ってくれたけど。でも、これも私の気持ちと一緒に、はつきりさせておかなきゃいけないことだから」

そう言いながら、彼女は浅かった息を無理矢理に深く吸い込み、続ける。

「大人としての建前とか、先生としての立場とか、色々あると思う。でも、今だけは、私と二人きりだからさ。その……先生の本音というか、ね。実際のところ、あの一件で私に言いたいこととか、沢山あるんじゃないかなって」

言葉の、そして彼女の緊張した表情の意味を考える。

「つまり、ホシノは私に怒って欲しいってこと？」

叱るという言葉を使わなかったのは、それを求められてはいないと感じたからだ。

「怒って欲しい……うん、そうだね。私がしでかしたことは、謝って終わりって話じゃない。先生は優しいから、あんまりそういうふうにはしないかもだけど……でも、やっぱり悪いことしたけじめはつけないとって思うんだ。だから、叱るんじゃないかって怒って欲しい」

あの後、帰ってきたホシノは後輩達からそれなりに怒られていた。同じことを先生である自分にも求めるというのは、律儀というかなんというか。

普段はだらけているように見えても、やはり根底の部分は生真面目なのだろう。

「一応確認だけど、私の言いたいことを言っているんだね？ 先生としてではなく」

その言葉に、承諾の意図をくみ取ったのか。隣に座るホシノは、安心したような、それでいて更に緊張が高まったような複雑な面持ちで小さく頷いた。

「うん。優しい言葉じゃなくていいから、全部ぶつけてほしいな」

「……………分かった。じゃあ、覚悟して」

こちらを見上げる視線を真っ向から見つめ返し、左手を伸ばす。ホシノはそれをわずかに目で追ったが、それよりも受け入れることを選んだのだろう。彼女は自分の肩、そして頬の横を通り過ぎる手を見送り、そして。

「せ、せんせ…………？」

抱きしめた背中中は、アビドスを背負うにはあまりに細く、小さかった。



背中に触れられた手から伝わる熱が、胸の中にあるものと溶け合っていくようだった。

「もう二度と、俺の前からいなくならないでくれ。手が届かないところに行かないでくれ。その苦しみを背負うのは自分だけだなんて……………そんな、悲しいことを言わないでくれ」

抱きしめられた腕は、思っていたとおり力強く、大きくて、震えていた。

それを感じた時には、自分の頬は彼の胸に押し当てられていて。

先生の匂いがする。聞こえる鼓動は少し速くて、その感情の強さを声高に主張している。

いつも着ている黒いワイシャツの肌触り。いつも自分達を後ろから見守ることに徹している彼が、今は自分の目の前、息を交すような近くで縋り、わなないていた。

「……うへ」

それを宥めるように、ホシノはたどたどしく自分の腕を彼の背に回す。自分はここにいると、そう言い聞かせるように、わずかに力を込めて。

先生だって、大変な目に遭った。シャーレは爆破され、病院に担ぎ込まれたし、治療もそこそこアビドスのために駆けつけてくれたのに。私は差し伸べられた優しさすらも置き去りにして、死地へ赴こうとした。

それなのに。本当に、つくづく、どこまでも。

頭上で、微かに鼻を吸る音がする。それを聞いて、ホシノはようやく理解した。

ああ。この人は、自分自身が誰かの悪意に傷つけられるより、私がそばにいないことの方がよっぽど痛かったんだ。

「怖かった。ホシノを喪うことが。もう一人の俺から託されたものを台無しにしてしまうことが。目の前で、生徒に^{シロコ}あんなことを強いるのが。大人としての責任を果たせないことが」

いつしか、この人に頼りたいと思っていた。自分の弱さを全て預けたいと思っていた。

だけど今は、同じように自分を頼って欲しいと、弱さを預けて欲しいと、そう願っている。

「ごめん。ごめんなさい、先生。もう、どこにも行かないよ。私はずっとここにいる。だから泣かないで」

「……泣いてない」

「そっか。うん、そうだね。先生は泣いてない。おじさんの気のせいだ」

The year and beyond : **Life goes on.**



「ですが、規制線の向こうは生徒達が暴徒化しているような有様で……」

「へーきへーき、これがあるから」

こういう時は、周囲を刺激しないためにも、迅速に動くためにも、单身の方が身軽でいい。肩に付けた無線機を繋ごうとする生活安全局員に首を振り、左手に持っていた白いアタッシュケースを揺らす。

近未来的でシンプルかつ武骨なデザイン。その表面には、連邦捜査部シャーレのロゴが刻まれていた。

「それ、もしかして噂に聞くシャーレの最新装備ですか!? ミレニアムのマイスターと天才ハッカーの共同卒業制作だとか……あの、触ってみても……?」

「いいより。でも、まずはお仕事片づけてからね」

目を輝かせる生徒達。やっぱり、この歳の子たちはこういうの好きだねえ。そんなことを思いつつ、モニターに表示された監視カメラの中継映像と座標は見逃さない。

銃声の間隔、配置を数え、記憶し、頭の中の見取り図に照らし合わせる。これまで何度も繰り返してきた準備だ。

「うん、大体把握したかな。それじゃ行ってくるから、逃げてきた子がいたら保護してあげて」「了解しました、お気をつけて!」

テントから聞こえる見送りに片手を上げて応え、外に出る。

そして、改めて大通りの惨状を見つめた。

ビルに突き刺さる携行ロケット。火を噴き飛び交うヘリコプター。止めどない銃声と爆発音、そして諍いを続ける叫び声。

絨毯のように敷き詰められた空薬莖を低いヒールで踏み越え、漂う硝煙に苦笑する。

卒業して、各地を飛び回ったが……どこに行っても、キヴォトスの空気はこの匂いがした。

「やっと夜勤明けで帰ってこられたと思ったら……ほんとに、手の掛かる子達ばかりだ」

『提案。マスター、"チェーホフ"にアクセスしますか？』

戦場には少し似つかわしくない、怜悧で無機的な女性の声。聞こえたのはアタッシュケースからだ。それに驚くこともなく、ホシノは右肩に担いでいるガンケースの肩紐を掴み、即座に首を振る。

「この程度のことでは開けてられないよ。余計な気を回さなくていいから。それよりノックス、あの人が連絡は？」

『確認。メッセージは一件。「気をつけて。こっちもあと数日で戻るから」とのことです。自動返信機能を使用しますか？ メッセージ候補「愛してる」「早く会いたい」「抱い」』

「だーかーらー、余計な気を回さなくていいってば」

少し赤くなりながら、持ち上げたアタッシュケースを右手で小突く。ノックスと呼ばれた自律知能管制システムはそれ以上何も言わず、自動返信機能をオフにした。

「まったく、ここから危険地帯なのに気が抜けるじゃん。それより——コード9104ね」

『シールドモード、展開』

コード、そして四桁の数字を認証した鞆がひとりでに開き、内蔵された機巧が動き出す。畳まれていた外装が変形、構築するのは、かつて彼女が携えていた黒鉄とは対照的な、白鉄の大盾。

『個人携行式複合型警護ユニット“ノックス”、スタンバイ』

「じゃ、行こうか」

一年後、キヴォトス。

小鳥遊ホシノ、十八歳。

シャーレ所属——現在、教育実習中。



数時間後。ヴァルキューレ公安局、取調室。

打ちっぱなしのコンクリートがむき出しとなっている、冷たく暗い室内。くたびれた電気スタンドに照らされた調書を目でなぞりながら、ヴァルキューレ所属の尋問担当員は小さくため息をついた。

「あの、もう一度……今度はもっと具体的に説明してもらえる？」

「だから、すごかったんだって！　こう、ずばーんって！　いや、しゃきーんかな。とにかく突然現れて、みーんなやつつけちゃったんだから！」

